

郝蘭皋の随筆

松枝, 茂夫

<https://doi.org/10.15017/2556553>

出版情報 : 文學研究. 33, pp.145-153, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



郝蘭皋の隨筆

松 枝 茂 夫

郝懿行といふ名は乾嘉時代に於ける經學大師の一人として、これまでとても全く知らぬわけではなかつたが、經學と聞いただけで自分などには到底解らぬものと初めから敬して之を遠ざくるの外はなかつた。その後、いつの頃からか郝氏に對して何とはなしに好意を懷くやうになつたのは、例によつてこれも知堂先生の書かれたもので郝氏の隨筆の面白さを知らされたからである。この程やうやくの思ひで「曬書堂集」をはじめ、「山海經箋疏」「宋瑣語」「晉宋書故」「詩問」等といったものを手に入れた。さうして自分にわかりさうな處を方々讀み漁り、この溫雅で謙虛で樸訥でしかも中々幽默ユーモアをも解する好も

しい學者の人物に些か觸れることが出來て、甚だよい氣持になつてゐる。支那の本はどうも辛氣臭いばかりで、お恥かしい話ながら、心から好きでたまらぬといふやうな本を私は幾らも知らぬのだが（在りやうはまた一向漢文が讀めないからなのである）、その少い數の中に、最近に到つて郝蘭皋の隨筆を加へることが出來たのを自ら喜んでゐる次第である。

かの老大なる「郝氏遺書」にはまだお目にかゝる機會を持たぬ。蘭皋の主著としてはやはり「爾雅義疏」が擧げられねばなるまい。しかしそれは吾々門外漢のよく窺ひ知る所ではない。郝氏が草木鳥獸を注するに多く親ら

の耳目目に依據したこと、又常に民間の知識及び俗名を引用してゐること、さうしてそれは在來の名物專攻の學者達がたゞ古い書物をひつくりかへし、舊説を楯に取つて牽強附會し、徒らに訛に訛を重ねるのみで、かんじんの實物に對しては茫然として何等知る所が無かつたのとは全然その趣を殊にするといふこと、さうしたことを私は僅かに知堂先生の書かれたものによつて承知したにとどまる。私に多少とも解つて面白く思はれるのはやはり彼の隨筆で、「曬書堂集」の中に收められてゐる「曬書堂筆錄」六卷がその最たるものである。

* この「曬書堂集」には蘭皋の詩文の外に、その父郝培元の文に蘭皋及び蘭皋の友人が評を加へた「梅叟閒評」二卷や、蘭皋の妻王照圓の「閨中文字存」一卷、また夫妻の唱和詩集たる「和鳴集」一卷なども入つてゐる。この王夫人は「列女傳補注」だとか「列仙傳校正」などといった堂々たる學術的の著書をも有する程の人である。夫妻の合作に係る「詩問」及び「詩説」は、詩經に對する妙解に富んだものとして知堂先

生の屢々引いて賞揚せられる所であるが、二人とも經學を專攻しながら本當に文學のわかる人達であつたことも嬉しい。これで見れば王夫人の機鋒の鋭さはむしろ遙かに夫君を凌ぐものがある。中々才はじけた婦人であつたと思はれるが、女學者に有りがちのイヤ味な處が全く見られないのは愈々有難い。夫君は何しろあゝいふあくまでおつとりとして世間の事にはとんとうといふ朴念仁である。模糊(ボンヤリ)といふ渾名を奉られ、召使から少からず馬鹿にされても一向平氣で、反つてそれを面白がつてゐるやうなところさへあるお人好しである。この夫君をして貧しい中に四十年餘念もなく屹々として樸學の研鑽に心魂を打込むを得しめた夫人が内助の功は讃へられてよい。當時の學者の間に、「高郵の王父子」(念孫・引之)、「棲霞の郝夫婦」と並び稱せられて、その伉儷の篤さを羨まれてゐたのもさてこそと察せられる。(その王引之と蘭皋とが共に嘉慶四年の進士で同年の誼みがあつたのも奇縁である。)

さて私をして初めて蘭皋の人と爲りを想望して已む能はざらしめたものは、知堂先生の「模糊」と題する一文(「苦竹雜記」に收む)であつたのである。それで「筆錄」

卷六の同じく「模糊」と題する小文を先づ紹介しようと思ふが、實際譯してみると、どうもいけない。原文の味が全く失はれて、形骸だけ残つてしまつた感が深い。原文が立派であればある程、その移譯はむづかしく、さうして原文と似ても似つかぬつまらないものになつてしまふといふのは何とも情ない口惜しい事である。

模 糊

私はまだ幼い時分には、私の家には奴僕がやたらに澤山ゐた。その後、家の暮しが左前になると共に、ぼつぼつと彼等に暇を取らせてそれぞれ生計を營ませることにしたら、働くことの嫌ひな連中は大抵役所の隸卒になつた。さうして私が壯年に達した頃までには大方残らず暇を取つてしまつて、主人と召使とのけじめさへ今はあまりはつきりせぬ程になつてゐた。けれども私は少しも意に介せず成りゆきに委せておいた。私と牟駄人とは住居が接近してゐた。彼を訪ふにはどうしても縣署の門前を通らねばならない。ところがその門には私の家でもと奴僕だつた連中が人々と一緒に屯ちしてゐて、私がその前を通つても、てんで起ちあがらうともせぬどころ

か、知らぬ顔をしてすましてゐるのである。それで私はいつもこれを避ける爲に廻り道をするか、或は縣署の門の遙か手前の方から面を伏せて走り過ぎるのを常とし、よく亡父に向かつてその話をして笑つたものである。

また私の町に濱都宮といふ廟がある。丘長春先生御生誕の地で、正月十九日の御生誕の日には大勢の參詣者で非常賑ふ。ある時のこと、私は友人と一緒に歩いてお參りに行つた。宮までまだ半里餘もあらうといふ所で、ふと向ふから驢馬に乗つてやつて來るのを見れば、私の家でもと奴僕をしてゐた李某の息子の喜兒といふ者であつた。今では父子とも役所の書記か何かをやつてゐて、町の人から爪弾きされてゐる。我々の前數歩の所まで來た時、奴さんいきなりビシリ／＼と驢馬に鞭をくれたかと思ふと、會釋一つすればこそ、仰向にのけぞつたまゝ、とつとと駈け過ぎてしまつた。そのとき同行した李君や趙君などが私に訊ねられた。

「今通つて行つた男を貴君は知らないのですか。」

「知つてますよ。」

「どうして下りて挨拶しなかつたのでせう。」

「僕の方では知つてゐるんですがね、あちらはあの子がま

近年の行かぬ時分に住込先を換へたのだから、随分知らないこともあり得るかと思ひます。」私はさう答へた。

あとでこの話が一族の長者の方の耳にはいり、私は呼びつけられて厳しく詰じられたのであつたが、私はよい加減にお茶を濁して引き退つた。

もう一つ、王某といふのは、これももと私の處の奴僕の子であつたが、あるとき酒を食つて私の家に押し掛けて來て、大きな聲で私に喰つてかゝつたことがある。その時も私は取り合はずになすが儘にさせておいた。この爲に私は家の者から「模糊」といふ渾名を奉られたわけだが、私は笑つて有難く之を頂戴した。

譯文は全く成つてゐないが、この氣分は實にいゝと思ふのである。知堂先生によれば、模糊とは精明に對する語で、糊塗とは別だ。多分糊塗とは精明なる能はざることであり、模糊とは精明を爲さぬことだ。つまり一は泰山を挾んで北海を超ゆる能はざるものであり、一は長者の爲に枝を折らぬ類である。さうして模糊にも亦いゝの

とよくないのと二種あり、己れの爲には大いに模糊であつてよいが、人の爲に模糊であるのは甚だ宜しくない。蓋し前者の場合、模糊であることは即ち「恕」であると言へるが、後者の場合では模糊ならぬことこそ「義」であるからだ。先生はそこで傳青主の例を擧げ、彼が家庭や郷里では極めて模糊でありながら、山西督學袁繼威の爲に冤を鳴らして奔走するや、他の秀才達がコソ／＼と逃げ隠れする中に在つて、たゞ一人敢然として熱烈な行動を爲したことを口を極めて賞讃してゐられる。

蘭泉の模糊の一斑を窺ふに足るものとして次の一文も最もよい例である。これは文集卷五にある。

亡書失硯

以前私の持つてゐた「顏氏家訓」は坊間の俗本で別段愛惜する程のものではなかつたけれども、各頁の上端の空白に、私があけて見る毎に書き入れた箋注が積り積つて百數十條にも達してゐた。その後誰かに持ち去られてしまつて、今以て思ひ出されて忘れられぬ。

もう一つ仿宋本の「説文」、それは旗人で織造の職をつとめてゐられた額勒布公が自費を投じて出版された極めて精巧な本で、以前私の「山海經箋疏」と交換して手に入れ、大いに珍藏してゐたのであつた。それがこの頃搜してゐるけれどもどうしても見當らぬのである。どうやらこれも他人に持つて行かれたものらしい。司空圖の詩に

「劍を得るは乍ち健僕を添へたるが如く、
書を亡ふは久しく良朋を憶ふに似たり。」

とあるのは、いかにもその通りと思はれる。借りた本を還すのは癡の一つだといふ云ひ方に私はかねがね反感を持つてゐるが、私の交際してゐる人々にさうした癡人の絶えて少いのはどうしたものであらうか。

又私は芭蕉の葉の形をした白い端溪石を一つ持つてゐた。宋代の式に仿つて下が空洞を爲し、^{くぐくぐ}鵝鴨眼がいくつとなくあつた。これを雕つて柱懸けにすると、鍾乳の垂れたやうに高下相生じてゐる様は、まことに見事であつた。これは十年前に膠西の劉大木椽が千餘里を遠しとせずしてわざわざ私の爲に持つて來て贈つてくれたもので、私は匣を作つて大切にその中に入れ、應接間の机の間に置いてゐたのである。それを一

體誰が攫つて行つたものか、その後轉居する際あけて見ると、匣ばかりで中實はなくなつてゐた。良き友のかたみがどうしても忘れられぬまゝに、聊かこれを書きつけておく次第である。

それから私の名字のはいつた印章二つ、一つは青田石でこれも劉大木が鑄つてくれたものであつたが、ある時それが市に需がれてゐたのを友人牟若洲が知らせてくれたので、たうとう取りかへした。

また葉仲寅が曾て小市で「郝氏頓首」とある銅印を拾つたが、それは玉筋の紋様をなし、篆法も清勁なら色澤も古雅で金石に精しい葉は、これは恐らく元時代の物であらうと鑑定し、書翰の用に供するやうにと私に贈つてくれたので、大いに愛藏してゐるわけである。それにつけても前に失つた物を念ひ、この銅印もこれから數十年の後には多分人に贈られ、さうしてまた誰かに愛藏せられることであらうと思ふのである。

少しも飾らぬ文章で、一見何でもない事のやうに去りげなく云つてすましてゐるやうでありながら、そこに何ともいはれぬしみじみとした愛惜惆悵の情の現はれてゐる。

ること、確かに知堂先生の云はれる通りであると思はれる。

次に「炒栗」を挙げよう。卷三にはこの篇をはじめ

「梅漿」「芭」「諸葛菜」「炒麵」「長生果」「杏酪」「芽韭」

等々が並んでゐる。いづれも「爾雅義疏」の著者の面目

躍如たるものがある上に、文章も悠容迫らず、讀者をし

て自らなる微笑を禁じ得ざらしめる。蘭皋の詩はあまり

良くないやうであるが（王夫人も同様に上手とはいへぬ）、

不思議にもその文章はどれも詩味に富んでゐる。

炒栗（あまぐり）

栗は生で食ふと滋養になるが、新しいのは味が無いので些か物足りぬ。よく乾いたのは實においしい。蘇子由の栗の食べ方もやはりよく乾いたのを選んで食べればよいといふにとゞまる。しかし今日ではどここの店でも炒栗の作り方を傳へてゐる。

私は幼い頃、塾から夕方歸るとき、街頭で甘栗を賣る呼聲を聞くと、舌のつけ根のあたりから唾液が流れてならぬので、

いつも袖一はいに買つて来て食つたものである。その栗は非常に小さくて殻は薄く、なかに肉が一ぱい詰まつてゐた。糖膏（俗に糖稀と名づける）で栗を煎ると、殻はじんわりと柔くなり、手でちよつと剥けば、殻と肉はわけもなくポロリと離れ、薄皮が喰付いて取れぬといふやうなことはない。それがまことに小氣味よく感ぜられるのであつた。

京師に来てみると、店の前に鍋を据ゑ、一人は火に向ひ、一人は高い腰掛に乗つて柄の長い鐵の杓子でもつて頻りにまんべんなく之を攪き拌せてゐる。その栗はもつと大きく、水飴を和した砂利を利用する製法も、私が幼い頃に見たのと同じであるが、おいしいことは尙一層優つてゐる。都市では大きな聲で甘栗々々うまい／＼と呼賣りするのがいつの頃からか風習となつてをり、間食物の中でも殊においしいものの一つに數へられてゐる。

偶と『老學菴筆記』を讀むと、その卷二にかういふ話が載つてゐた。

故都（北平）の李和の炒栗といへば、その名は四方に鳴り響いてゐた。他の者がいくら苦心して眞似てみても、どうしても及ばないのであつた。紹興年間、陳福公と錢上聞とが金の國

へ使して燕山(今の北京の近郊)へ來られた時、何處からともなく二人の男が炒栗を各々十包みづつ持つて來てそれを二公に獻じた。三人の隨員もそれぞれ一包みづつ送られた。件(くだ)の二人は「李和兒でございます。」と自賛し、涙をこすりながら歸つて行つた。云々。

惜しむらくその製法はつひに傳はらず、陸放翁(老學庵筆記の著者)はこの話を書きつけはしたものの、詳しいところまで述べることは出来なかつたのである。

それから特に幽默文の例としては次のやうなのを挙げても可からう。

入廁讀書

古い傳説に據れば、ある婦人は熱心な佛教信者で、廁に入つた時でも止めずに經を唱へてゐたので、その果報めでたく、たうとう廁の中で見事大往生を遂げたとか。模範的な教訓談となつてゐる。これは佛教の方で人を教へさす爲の作りごとであると思はれ、必ずしも信用は出来ぬが、たゞこれによつても穢い場所が物を讀むのにはあまり適したものでないことがわかる。

『歸田錄』に據れば、錢思公は平生讀書を好まれ、坐する

時は經史を讀み、臥する時は小説を讀み、廁に上つた時には小詞を聞せられた。謝希深も言つてゐるが、宋公垂は廁に入る時には必ず本を抱へて行き、その諷誦の聲は琅々として遠近に聞えたさうである。云々。

私はこれを讀んで甚だ可笑しなことだと思つた。廁に入つて禪(ぜん)を脱ぎ、手には又本を持つてゐるとは、あまりにきたないばかりでなく、又あまりにも忙しなことで、いくら篤學な人だつたにせよ、何もさうまでせずともよいのではあるまいか。歐公(歸田錄の著者)はなほ希深の「平生作る所の文章は多く三上に在り、乃ち馬上・枕上・廁上なり」といふ言葉を記錄して、「つまりこれらは思索を練るのに最もよい場所だといふ程の意味であらう。」といつてゐられるが、むしろこの言ひ方が遙かに心にくい。その心にくさは、びつたり當つてゐても少しも浮いた所がない點に在るのである。

またこんなのはどうであらうか。

山水を知らず

『香祖筆記』卷十に云ふ、

古來、謝康樂だとか宗少文といった連中のやうに、山水が好きで病みつきになつた人も多かつた(中略)ところが私(香祖)

の著者
王澐洋と同年及第の吳君といふ人は、順治末年の進士である

を觀れば、これまた美談である。

もう一つ例を擧げておしまひにしよう。

本 色

西京のさる僧院の裏手に見事な竹園があつて、士大夫たちはよくそこへ遊びに出掛けられた。文瑤公(其の名字)
(相安公傳)もそこを訪れ、大いにその景色を愛でられた。そこで僧が木の札を具へて御命名をお願いすると、公は欣んで承諾なされた。さてそれから數ヶ月たつたが、とんと音沙汰がないので、僧が幾度か足を運んでお願いしたところが「わしは君たちの爲に、一ついい名前を附けようと考へてゐるのだ。まだ案じつかぬから、もう暫く待つてくれ。」との御返事だ。さうしてそれから半年もたつてからやつと送り返された札を見るに、何と「竹軒」と題してあつた。まことに心にくい名の附けかたではないか。正にかう來なくては嘘である。これを他の者にやらせて見るがよい。それこそ「綠筠」だの「瀟碧」だのと、此君に尊號をたてまつる連中が多いのである。(尤西宮「良書」
續「」卷八)

それで私は古人の云つたことを思ひ出す、曰く「平素自分は三つの願ひを抱いてゐる。一には願はくは世界中の好きな全部と友達になりたい。二には願はくは世界中の好きな全部讀んでしまひたい。三には願はくは世界中の好きな山水を全部見盡くしたい。」すると或る人これに答へて「全部を盡くすといふことがどうして出来るものか。たゞその場に行き合せたらうつかり放さぬやうにせいゝ心懸けるまでだ。」と云つたといふ。私はこの達言に感服し、美談だと思つた。かの吳君といふ人はどういふ人か知らぬが、その人のさういふ言葉

を觀れば、これまた美談である。

かつたことであらう。しかも半年が間考へを練つた末、はじめて悟りを開かれたのである。千古の文章の事業は、みなこのコツで行かなければならぬ。

以上六條のうち五條までは知堂先生がどこかで引用されてゐるものである。蘭皋の隨筆はかういふのが凡そ三四百條にも達しようが、その中から特に五條か六條を選び出すとなると、取捨に迷はざるを得ない。易きに附くやうではあるが、結局知堂先生の選擇眼に服さざるを得ないのは是非もない次第である。

蘭皋の隨筆に最も多く引用せられる本としては顔之推の家訓、歐陽修の歸田錄、陸放翁の老學菴筆記、王漁洋

の香祖筆記、尤洞の艮齋雜說等が數へられるが、そこに蘭皋の好尚がよく窺はれ、さうしてそれは私の好みにもよく合ふやうに思はれる。少くとも私は蘭皋の導きによつてこれらの筆記を玩弄するの樂しみを會するやうになつた（艮齋雜說はまた見るに及ばぬが）。しかもそれらの作者に對する蘭皋の態度は謙虛で慇懃を極めながらも、又一方あくまで公正で、是を是とし非を非とすることを忘れず、さうしてそれを婉にして迫らぬ、情理兼ね具つた文章を以て行なうところ、まことに見上げたものである。